



展示されているコンバイン。経営の大規模化でますます大型化が進んでいる

十勝管内の企業も大型化に対応する。東洋農機（帯広市）が出展した未発売のジャガイモ収穫機は、製品タンクを2.4トンから3トンに増強。営業部の三好智博次長は

「途中で引き返しジャガイモを降ろさなければならなかったような、広い畑でも往復できる。トラクターの大型化で重い収穫機も引っ張れるようになってきた」とする。日農機（音更町）も、ビート収穫機のタンクを6.8立方メートルから7.7立方メートルに拡大したモデルを展示している。

ICT技術ではオセキ北海道（岩見沢市）が、異なるメーカーの作業機を付けても国際共通規格で操作できる「ISO-BUS（イソバス）」対応のトラクターをPR。ズコーシャ（帯広市）も無人ヘリコプターによる空撮で分析した土壌データを基に、適切な施肥量を自動調節するシステムをアピールしている。

国際農機展に出展された農業機械は、将来の十勝の主力となることも多い。こうした大型農機やICT技術が、十勝の畑でも近い将来、見られることになりそうだ。

国際農機展閉幕 見せ方工夫「新時代」発信

2014年7月15日

8年ぶりの開催を終えた第回国際農業機械展 in 帯広（10～14日、帯広市北愛国交流広場）は、過去にないほど国際色豊かな展示となり、来場者も約20万人に上るなど経済効果も含め十勝に活況をもたらした。各社の展示は新技術だけでなく見せ方にも工夫を凝らし、若手が担う新時代の農業を予感させた。一方で、農機が大型化する中、展示スペースや駐車場の確保が、4年後の次回開催への課題として残った。地元産業・観光業界を挙げたさらなる受け入れ体制の確立を求める声も出ている。



次回への課題もみえた国際農機展会場（10日）

開催委員会の有塚利宣会長は「今回は“国際”の名にふさわしい展示会になった」と胸を張る。海外から5カ国の企業・団体が出展し、韓国で秋に開かれる農機展の関係者500人も視察に訪れるなど、会場には世界各国からの来場者が目立った。

十勝で主力の輸入農機を製造する「アグコ」（本社アメリカ）のオーストラリア支社から訪れたデビッド・アルバレスさんは「わが社の農機は十勝と合うので、強いシナジー（相乗効果）を生むだろう。

展示では農機の大型化やICT（情報通信技術）はもちろん、「テントなど屋内展示が多く、映像を交えるなど、お金を掛けた会社が多い」と出展各社はみる。

農業も世代交代の時期で、来場者には20～30代の若い

農業者が目立った。出展各社は「若い世代や子供たちも農業に夢を見られるような“カッコいい”展示を心掛けた」「農業の未来は明るい」と発信したかった」とする。

展示スペース、駐車場に課題

ただ、農機が大型化する中、各社が事前に申し込んだスペースでは会場に収まりきらず、主催者側は縮小を要請。「もっとスペースがあればさらに充実した展示ができた」という出展者もいた。

近隣に駐車場も確保できず、会場と離れた臨時駐車場から来場者をシャトルバスで送迎したが、初日は循環が滞って長い行列ができる混乱も発生した。山田政功実行委員長も「次回に向けて考えたい」と話し、出展社アンケートなどを通じて解決策を探る考えだ。

来場者数は3連休を含んでいた前回（2006年）の24万5000人と比べると減少した。台風による交通機関の乱れや、道外からの視察中止の影響も受けたが、会場への交通の利便性低下による来場者減もあるとみられる。

一方、経済界には約20万人の来場者をもたらず経済効果を十分に取込みできなかったとの指摘もある。開催期間中、会場外では歓迎ムードの盛り上がりを欠いた。帯広商工会議所の高橋勝担会頭は「経済界のサポートが不足した点は反省材料。世界的な大イベントという認識で取り組めるかが次回への課題だ」と話している。